昭和63年度厚生省心身障害研究
「母子保健システムの充実・改善に関する研究」

今日の思春期性行動と思春期妊娠をめぐる問題

武田　敏*
飯野義博*

著者の過去２０年間にわたる思春期妊娠の継続調査成績と厚生省による妊娠中絶全国統計の推移、及び日本性教育協会による思春期の性行動調査に基づき、１０代女子の性行動をめぐる問題点について検討した。　南関東の１０名の開業産婦人科医を定点として、昭和４３年～６２年わたり中高生(一部小学生も含む)の妊娠例報告を調査しているが、その要点は以下の如くである。

以上の２０年間の上記１０代妊娠例数を２年単位でみると、２３、３３、４０、５０、５９、６６、７６、６７、７４、７４、と昭和５６年までは増加の一途をたどり、以後横ばい状態を示している。厚生省全国統計でみると１０代の妊娠中絶数は(カッコ内は女子人口１,０００名に対する比)昭和４０年．１３,３０３(２．５)４５年．１４,３１４(３．２)、５０年．１２,１２３(３．１)、５５年．１９,０４８(４.７)６０年．２８,０３８(６．４)、６１年．２８,４２８(６．１)６２年．２７,５４２(５．８)と昭和６０年以降、減少の方向に向かっているとみられる著者の調査で２０年統計を前半と後半に分けてみると、総数２０５,３５７、高３、７３、１５６、高２、６９、１０９、　高１、３１、４２、中３、１９、３４、　中２、８、１１、中１、２、４、小３、１、年令分布に大差ないが高３の占める率がやや増加を示している。　妊娠例中、その結果が中絶になった数と比率を前半、後半で対比すると１６９(８２.４)、２７２(７６．２)でやや減少傾向を示す。

正常分娩は１７(８．３)、６６(１８．５)で比率として増加が著しい。その他は死産、自然流産、外妊、胞状奇胎等である。次に妊娠初期に産婦人科に来院した比率を比較すると前半は２０５例中１１５で５６．１%、後半３５７例中２６５で７４．２%、早期来院傾向が明らかである。　妊娠経験は前半２０５例中７１で３４．６%、後半３５７例中２２４例で６２．７%と著しく増加している。　妊娠して来院しているのであるから、避妊法に誤りがあるか、

*千葉大学教育学部
(University of Chiba)

避妊と性交時常用しないか何れかである。

しかし、１０代の性行為で以前より避妊が行われるようになった傾向を反映するデーターであることは確かである。

利用されている避妊法は、コンドームが最も多く避妊経験者２９５中２５４で８６.１％を示し、膣外射精４３で１４．５％、重複回答であるが他の避妊法利用例は極めて少ない。

以上のデータより、妊娠早期来院化と避妊利用率上昇を示さする現状は、１０代の妊娠に関する知識が向上しつつあると見うけられる。

最近の１０代妊娠数の横ばい又は軽度減少傾向は、避妊の普及によるものか、性行動経験率の変化によるものかの課題がある。日本性教育協会が昭和５６年及び昭和６２年に全国調査を行ったデーターよりみると以下の通りである。

高校生女子デート経験率５１.５→４９.７％男子４７.１→３９.７％、キス経験率高校生女子２６.３→２５.５％、男子２４.５→２３.１％、性交経験率高校生女子８.８→８.７％、男子７.９→１１.５％と報告されている。

昭和６２年度調査を行う前の予想としては１０代性行動経験率が大巾に増加し、米国やヨーロッパ諸国の統計に近づくと思っている研究者が圧倒的に多かった。　結果は予想に反して全般的鎮静化を示すものであった。

男子の性交経験率が上昇した以外はすべて低率化している。その理由について考察すると以下の諸因子があげられる。

第１に学校に於ける管理教育の強化がある。厳格な校則、生徒手帳に示される詳細な行動規則、生徒指導の徹底、校則違反者には退学、自主退学の対応が行なわれる。「行き過ぎた男女交際」「高校生としてあるまじき性行動」が当然その対象となる。　上からの強力なしめつけに対し、反抗が弱いのが新人類の一つの特徴である。

フラストレーション解消は弱者への攻撃に向けられ「いじめ」等の問題を起こしやすい。「学校によるペナルティ」の回避のため性行動が抑制される効果が認められる面がみられる。

第２はエイズを始めとする性病の恐怖再来をあげることができる。

ヘルペス、クラミジア、トリコモナス、尖圭コンヂローマ等旧性病以外のＳＴＤが若年層に増加しつつある。これらは性少年を対象とした諸雑誌にもセンセーショナルに報ぜられておりこの影響もあると考えられる。

学校性教育で、校医も講師とする性病に関する講演会を開く高校も増加している。
性病病変の恐怖写真を示して性行動抑制を教えるＳcare　Ｅducation　（脅育？）である。

第３には人より物に興味をもつ新人類の特性が性行動に及ぼす問題を考えてみたい。

プラモデル、ファミコン、テレビ等の一人遊びで育ち、幼小児から近所の子供と遊んだ経験がとぼしい。　カウチ・ポテト症候群と呼ばれるものである。　人間関係が不得意で「相手の気持ちを察し、ある点で自分を抑え、仲よくやってゆくことが」できない。男女交際にしても長続きしない。失敗を重ねると面倒にさえ感ずるようになるという。　テレビに登場する「自

己と同年令層の男女が演ずるドラマ」で擬似的体験や代償的満足感を得るとか、男子ではマスターベーションによる処理等がある。

第4に男女交際をするグループに質的変化がみられる。女生徒の間に男女対等意識が発達し、「男子の言うなりに性関係をもたない」女生徒が増加しつつある。未だ性経験のない、又は少ない思春期女子の性交欲は未発達であるから、親密な人間関係に発展しなければ単なる性衝動のみで肉体関係をＯＫする気持ちにはなれないのが普通である。

過去の男女関係のように圧倒的男性優位の型で人間関係が進行し男性の性欲に押し流されて性交を経験する事は女性として許容し難いのである。

この点に注目した新しい性教育の課題があると考えられる。

最後に我が国社会のSocial Dynamicsとしてイデオロギーの Swing Back 現象(著者)があげられる。Sexuality もこの例外ではなく、戦前戦中の保守的純潔教育、禁欲主義が戦後民主主義導入により解放化に向かった。時勢の振子は右→左に振れ性行動の自由化が進行し「性の人間化」の名のもとに性をEnjoyする風潮が高まった。

しかし物理学の法則に示す通りSwing が進む程、重力の接線方向分力が逆に働き、反対方向への復元力が増大する。

性解放の過度の弊害増大に対する批判が強まりCritical Pointに達すると Swing Backに転ずるのである。

我が国社会全体の流れとして保守回帰へのUターン現象が認められ、これが思春期の性行動にも強く作用しているものと推察される。

（文　献）

(1) 青少年の性行動、我が国の中学生、高校生、大学生に関する調査分析
日本性教育協会編、１９８８年

(2) 島崎継雄、青少年の性行動調査結果を再考する。
現代性教育研究月報 １９８９年 7巻2号

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

著者の過去20年間にわたる思春期妊娠の継続調査成績と,厚生省による妊娠中絶全国統計の推移、及び日本性教育協会による思春期の性行動調査に基づき、10代女子の性行動をめぐる問題点について検討した。南関東の10名の開業産婦人科医を定点として、昭和43年～62年わたり中高生(一部小学生も含む)の妊娠例報告を調査しているが、その要点は以下の如くである。